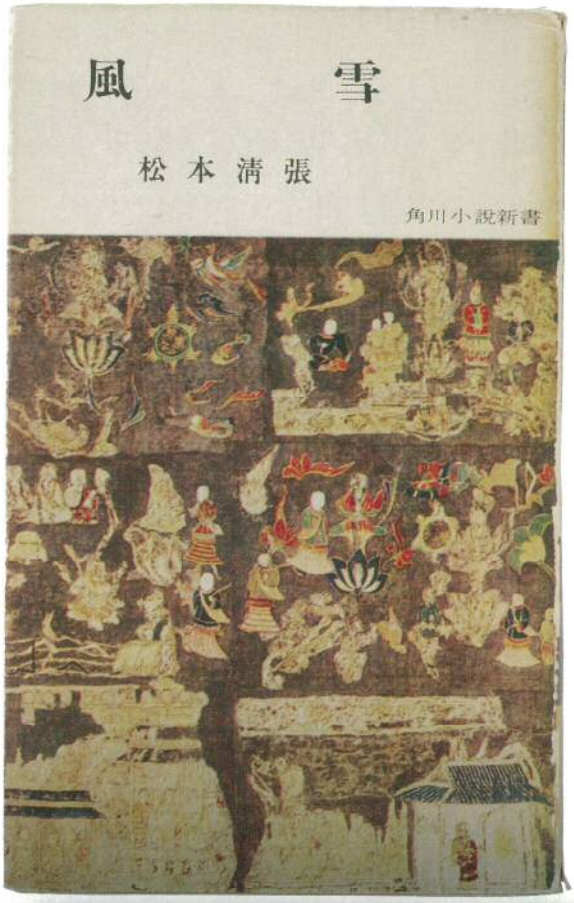
MATSUMOTO SEICHO MEMORIAL MUSEUM

松本清張記念館

◆館報◆
2007.8
第25号

Sが電報を各方面に打った。誰も来る者はなかった。



『風雪』（角川小説新書）
「断碑」初収録本 昭和31年11月 角川書店

「断碑」（原題「風雪断碑」）は昭和29年12月、
「別冊文藝春秋43号」に掲載された。

現在入手できる本
『松本清張全集』第35巻（文藝春秋）
『或る「小倉日記」伝　傑作短編集（一）』新潮文庫（新潮社）
『張込み　松本清張短編全集3　復刻新版』カッパ・ノベルス（光文社）
『松本清張小説セレクション33』（中央公論社）

目次

●松本清張研究会第十六回研究発表会……2
●企画展紹介
「新進作家 松本清張 取材に走る
――信州上諏訪・富士見行――」……4
●展示品紹介……5
●清張原風景「点描」……5
●研究誌「松本清張研究」第八号発行……6
●探検！清張記念館……6
●みんなの広場……7
●友の会活動報告……7
●トピックス……8

作品紹介

木村卓治が最初に考古学の教えをうけたのは、京都大学の助教授杉山道雄からだった。それから東京帝室博物館の高崎健二に指導を頼んだ。

高崎は調査報告を読んで感心し雑誌にも発表してくれた。高崎は卓治に博物館の助手を世話しようとしたが、結局、中学卒の学歴が障害となって入れず、東京高等師範学校に就職する。彼はそのことで高崎を恨み、憎んだ。以後、卓治は官学に向かって牙を鳴らすのである。

卓治は、グループを結集して中央考古学会を組織した。機関紙「考古学界」も出した。編集は卓治が受け持った。機関誌に載せたある調査報告書の内容は、今までの高崎様式とそれを少し進歩させた杉山様式に対する反逆であった。これを機に、高崎健二からは出入り禁止、杉山道雄とは絶交、博物館の佐藤卯一郎からも出入りの遠慮を告げられた。これからは高崎、杉山、佐藤の打倒を目標に闘います、と卓治は答えた。

卓治はフランスに留学したが、病をおしてのその一年は空虚であった。帰国後、卓治の研究は弥生式土器に向かった。初めて独創の主題をつかんだのである。遺物の背後に社会生活や階級制を見ようとする研究を次々と発表した。当時誰も考えなかったことだった。熱のある時は、濡れタオルを額に当ててペンを動かした。妻のシズエに感想を迫ったが、彼女も毎日熱が出、耳も遠くなっていた。

昭和十年十一月にシズエは一人で息を引いた。二ケ月後の昭和十一年一月、のちに考古学界の鬼才と言われた卓治も鎌倉で死んだ。電報が各方面に打たれたが、誰も来る者はなかった。三十四歳だった。

「断碑」は、不遇のうちに天逝（ようせい）した考古学者、森本六爾をモデルとし、「学問への直観力と、官学に対する執拗な反抗」を主題にその生涯を描き、文学的に「自分の道を発見した」と清張自身が語る初期の重要作品である。（学芸担当　中川　里志）

松本清張研究会第16回研究発表会

日時：平成19年6月16日（土）午後2時～
会場：東京学芸大学 N棟1階 103番教室

初めての東京学芸大学での開催でしたが、会員及び一般参加などを合わせて71名が参加しました。
研究発表では質疑応答も活発にくり広げられ、長時間の発表会にもかかわらず熱心に聴講していました。

講演

戦後史のなかの松本清張

――『日本の黒い霧』再考――

講師
桜井 哲夫氏

評論家。東京経済大学教授。
東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業。
東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得。

研究分野
ヨーロッパ社会思想及び近現代社会史

著書
『占領下パリの思想家たち』（平凡社・新書、2007）
『可能性としての戦後』（講談社・選書メチエ、1994）

大岡昇平の感情的な批判

『日本の黒い霧』は一九六〇年、「文藝春秋」に一年間連載されました。十二回で、「下山国鉄総裁謀殺論」から始まり「謀略朝鮮戦争」で終わる構成になっている。一見すると、様々な奇妙な事件が、米軍の仕掛けが、最終的に朝鮮戦争の開戦に向けて進められているような読み方も出来なくはない。それが「謀略論」、「陰謀論」と批判される要因になったかと思う。そうした批判の代表的なものとして、作家の大岡昇平が「群像」一九六一年十二月号に「松本清張批判」という文章を書いている。私は、なぜこれほど感情的な批判をするのか、非常にびっくりしました。大岡さんは、「松本の推理小説と実話物は必ずしも資本主義の暗黒面の真実を描くことを目的としていない、それは小説家という特権的地位から真実の可能性を摘発するだけである。無責任に摘発された『真相』は、松本自身の感情によって歪められている。『菊枕』や『断碑』等初期の作品以来一貫していた怨恨があり、被害妄想患者の作り出す虚像に似ている」と決めつけるわけです。

松本清張も、翌月の「群像」で「大岡昇平氏のロマンチックな裁断」という反論を書いていますが、この論争自体はあまり実り多いものではなかった。ただ私は、このような批判を書かせるに至った大岡の精神風景に興味を覚えました。大岡昇平は京都帝大文学部仏文科を卒業した後、川崎重工などに勤務して、一九四四年に召集されて七月にフィリピンのミンドロ島に送られているわけです。大岡はそのとき三十五歳。翌年一月、アメリカ軍の俘虜になる。この経験が有名な小説の「俘虜記」「野火」、それから「レイテ戦記」に繋がっていくわけです。

実は、二人は共に一九〇九年、同じ明治四十二年生まれです（大岡が三月、松本が十二月）。

松本清張の方も一九四四年六月に三十四歳で臨時召集されて、衛生兵として朝鮮半島に渡る。最終的には衛生上等兵として終戦を迎えている。二人とも小説家としてのデビューは四十歳を過ぎてからという共通点があります。中年の下級兵士として再召集を受けたことも共通します。学歴上の差違はあるが、二人は基本的に共通の世代体験をもった人間だった。そういう人間がなぜこうも感情的な反発をしてしまうのか。

では、大岡昇平は松本清張の米軍批判、占領軍批判そのものを嫌ったのかといえば、決してそうではなかった。というのは、例えば大岡昇平は「レイテ戦記」のエピローグで、一九四九年からのソ連を封じ込める路線への変換は、実は一九四三年、マッカーサーのオーストラリア西南太平洋司令部時代からの一貫して変わらないアジアの武力制覇の構想で、彼の政策がアメリカの世界戦略と合致していたことはその後の歴史が証明している、と書いており、アメリカの占領支配を非常に正確に見ていたと分かるわけです。そうすると、大岡昇平の不満は、松本清張は支配者マッカーサーとその背後にあるアメリカの世界戦略に眼を向けずに、占領支配についてG2（連合国軍総司令部参謀部第二部）とGS（民政局）の対立というマイナーな問題に歪曲したことに対する不満だったのかもしれない。

確かに松本清張の『日本の黒い霧』は、公開されたアメリカ政府資料もなく、占領軍研究もほとんどなかった時代である割には、事件の問題点に肉薄している仕事だとは思う。しかし、現時点から見ると、いかんせん事件をあまり脈絡づけることなく、ごった煮のごとく羅列しているという感は否めない。もう少し焦点を絞って論じた方が、アメリカ政府の影というものを強く読者に伝えることができたかもしれない。しかし、清張は「何かのかたちでメモしておかなければ、将来、分からなくなるのではなかろうか、というのもこれを書いた私の秘かな気負いであった」と「なぜ『日本の黒い霧』を書いたか」（「朝日ジャーナル」一九六〇年十二月四日号）で書いています。つまり、正史からもれ落ちてしまうような事件をこれだけ集めて後世に残し、議論の基盤を作ったという功績は誰しも否定できないと思います。また『日本の黒い霧』は生の素材をぽんと投げ出している。今の時点から見ると、その方がむしろありがたい。変にイデオロギーが入っていない。変に脚色したり自分で都合のいい物語を作っていない分だけ、利用しやすい。素材をどう処

理するかは、読んだ人間の力によるわけです。

このように、大岡昇平がどちらかというとアメリカの世界戦略という、空の上から地上の構図を眺めるような、いわゆる鳥瞰図、鳥の目で見る図式に拘ったとするならば、松本清張は作家の小田実が作りだした言葉ですが、地上を這いずる虫、虫の視点、つまり生活者の視点から見る虫瞰図、地上を這いずり回って資料を集めて読みこんでいくという虫瞰図的視点に拘ったという違いがある。このアプローチの仕方の違い自体が、こういう相互反発を生んだと言えなくもないという気がします。

「帝銀事件」と「下山事件」、そして「征服者とダイヤモンド」

次に、事件の具体的な検討に入らせていただきます。

『日本の黒い霧』の中で、ここ十年くらいで多少とも謎が解けた感がするのは、「下山事件」と「帝銀事件」、この二つであろうと考えております。

「下山事件」は長い間、分からない事件でした。ここ三、四年の間に急速に進展しました。自分のお祖父さんが関係者ではないかと疑った、柴田哲孝さんというジャーナリストが、週刊朝日の記者の諸永裕司さんとか、映像作家の森達也さんなどにその話をしたことで、調べ始めたのです。三冊別々の本が出されました。一番最後に出た柴田哲孝さんの本『下山事件――最後の証言』(二〇〇五年)は、非常に衝撃的な内容を持った本です。

実は日本の戦後史について決定的な問題を、誰も論じてこなかった。松本清張だけは『日本の黒い霧』の「征服者とダイヤモンド」という項目でこの問題を取りあげている。つまり、日本の戦後の政治的再編を作りだした資金はどこから出てきたのか。吉田茂内閣以降の日本の保守党の資金源はどこであったのか、という問題が実はここで提起されているわけです。

実は、これと柴田哲孝さんが明らかにした、自分の祖父が関わっていた日本橋室町のライカビルにあった亜細亜産業という会社とが大きな繋がりを持っていることが分かってくるわけです。この会社の社長が矢板玄(くろし)。戦時中、満州で矢板機関という軍の特務機関を率いていて、盧溝橋事件のときに暗躍して勲章をもらった人物です。この人物は戦後、日本金銀運営会の専務理事をやっていた。日本金銀運営会というのは戦時中に強制接収された貴金属を扱っていた組織なのです。これが松本清張の「征服者とダイヤモンド」に繋がっていきます。そして、柴田さんが大叔母さんから、亜細亜産業が入っていたライカビルの地下に、金の延べ棒が百本あまりも積まれていたという話を聞くわけです。これこそ、国民から供出された貴金属だったわけですね。もう一つ、児玉誉士夫などの右翼グループが戦時中、中国大陸から強奪して日本に運び込んだ大量の金銀、ダイヤモンド、プラチナなどがあり、それも実はこのライカビルで一緒に管理していたわけです。

松本清張はその「征服者とダイヤモンド」の中で、戦時中のダイヤなどの供出貴金属類はいったいどこに消えてしまったのか、と問いかけています。柴田哲孝さんの『下山事件』を読むと、そこで繋がってくるわけです。接収貴金属を管理していた団体は、GHQ(連合国軍総司令官総司令部)やそれから右翼、それから保守党の政治家たち、そういう連中と全部繋がっていることが浮かび上がってくるわけです。

もう一つ重要なのは、松本清張は「下山総裁謀殺論」の中で下山総裁の替え玉論を展開している。柴田さんの本でも替え玉がいたという。末広旅館で休んでいた下山総裁は替え玉で、一九五五年に消された李という朝鮮人だったというのです。さらに旅館の長島フクという女性の夫は、実は戦前の特高警察の警官で、そういう夫を持つ長島フクの証言は偽証だろうと推測できる。

それから、「下山事件」はいったい何だったのかと、柴田さんは類推する。柴田さんの見方では、下山総裁の謀殺事件の背景に、国鉄の大量首切りの問題はないと言う。実は下山定則という人は非常に正義感の強い人で、国鉄内部の汚職を摘発しようとしていたのではないか。一つはシャグノンという、CTS(鉄道管理局)の中佐も国鉄に関わる利権に関わっていた。政治家も含めてそういう人間はたくさんいるわけで、彼らにとって都合が悪くなってきたのではないか。

アメリカが日本社会に残した刻印

『日本の黒い霧』を含めて松本清張の作品世界には、大岡昇平がルサンチマン(恨み・つらみ)の塊だと批判した部分があることは確かに事実です。しかし、屈折したアメリカとの関係が残念ながら今日まで続いており、政治の世界でも経済の世界でも未だにアメリカの影から抜け出せないこの国で、どうして一般庶民のアメリカに対するルサンチマン(恨み・つらみ)をあざ笑うことができるでしょうか。できないでしょう。憲法9条を押しつけだとして改憲する目的が、自衛隊を米軍と一体化して米軍の戦闘行動に無理なく参加するためだなんていうのは、他の国から見れば信じられない話であるわけです。いったいこの国は、本当に独立国家なのかと思われるでしょう。結局アメリカ合衆国の一州に加えてもらうことが、戦後レジームの決算なのか。

いずれにしても、存命なら松本清張は占領下のマスタープランどおりに政権を握る政治家たちが支配されてきた結果だと言ったかもしれません。そういう意味では、『日本の黒い霧』の世界はまだ終わってないし、もしかすると占領も終わってないのかもしれません。

研究発表

〈自叙伝〉の戦略
――菊池寛『半自叙伝』から松本清張『半生の記』へ

発表者
石川　巧 氏
立教大学教授。近代文学・現代文学。
立教大学大学院博士後期課程満期退学。
山口大学人文学部助教授、
九州大学大学院助教授を経て、現職。

特別企画展

『新進作家 松本清張 取材に走る
――信州上諏訪・富士見行――』

開催期間：平成19年8月1日(水)～10月31日(水)

会　場：記念館2階ホール

松本清張は、昭和28年1月、「或る『小倉日記』伝」で芥川賞を受賞したのを機に、東京への転勤を願うようになります。念願がかない、同年12月1日付で朝日新聞東京本社へ転勤となります。

上京直後のこの頃の様子を、松本清張は「日記」につけていました。「日記」からは、東京ならではの取材や創作の便利さを喜び、精力的に土地を訪れ人と会って話を聞く、新進作家・松本清張の姿を見てとることができます。

その一齣として、今回の企画展では、同年の年末年始の休暇を利用した信州上諏訪・富士見への取材旅行の様子と、その取材から生まれた作品を紹介しています。

信州上諏訪

高島城跡
諏訪市博物館所蔵

(略)上諏訪に二三日いて高嶋城を見に行ったときに、この小説(「面貌」―編注)の構想を得た。
「あとがき」(『松本清張全集』第35巻)

藤森栄一
諏訪市博物館所蔵(藤森みち子寄託)

森本六爾
諏訪市博物館所蔵(藤森みち子寄託)

清張は、不遇のうちに夭逝した考古学者、森本六爾について、弟子で上諏訪在住の藤森栄一氏から話を聞きました。後にその取材は初期の代表作「断碑」(昭和29年)に結実します。

初公開資料

昭和28年12月上京当時の「日記」(直筆・複製)

芥川賞を受賞し、まだ新聞社に勤めながら作家として成長しようと努力していた松本清張の、当時の生活、出版社からの依頼、精力的な創作・取材活動の様子が読みとれる、貴重な直筆「日記」。

森本六爾から藤森栄一氏に送られた書簡
諏訪市博物館所蔵(藤森みち子寄託)

東京考古学会の機関紙「考古学」(昭和5年・初年度)への原稿依頼の葉書から、昭和11年1月25日付、父親(森本猶蔵)名による計報葉書まで、多数の書簡が森本六爾から藤森栄一氏へ送られた。これらの書簡からは、研究者としての森本六爾のみならず、人間・森本六爾の姿をかいま見ることができ、さらに師弟の深い愛情にふれることができます。

富士見

富士見高原・昭和30年頃
〔白樺と八ヶ岳〕
富士見町高原のミュージアム所蔵

高原の道は矢上ひとりだった。白樺の林が点在する道であった。富士も、八ヶ岳も、鋸山も、駒ヶ岳もそれぞれの方角に雪をかぶった白い姿を見せた。南国に生れた矢上は心を奪われた。
「湖畔の人」

細川隼人
細川一夫所蔵

松平忠輝
『諏訪史第四巻』より
(諏訪教育会転載許可)

清張は、徳川家康の六男で、後に改易され諏訪城主諏訪頼水に預けられた松平忠輝のことを、郷土史家の細川隼人氏に聞きました。これらの取材を元に、「湖畔の人」(昭和29年)、「二すじの道」(昭和29年)、「面貌」(昭和30年)の三作品が書かれました。

展示品紹介

尋常小学校の地理教科書

「旅に憧れを持ちつづけていた」という清張の旅は、「半生の記」によれば、地理教科書からはじまっている。

小学校のときから地理が好きだったが、そのころの教科書は写真がなく、ほとんど凸版の絵だった。私はその絵にどれだけ空想をかきたてられたかしれない。地理の教科書から旅の魅力を覚えたと言ってよかろう。

（「半生の記」）

写真は清張と同時代の教科書である『尋常小學地理書　兒童用』と『小學地理』。開いてみると、挿絵や地図は白黒の簡素な線だが、清張の育った九州北部一帯の工場分布図や、当時繁栄していた八幡製鉄所が、きわめて細密に描かれている。写真入りで色鮮やかな現代の教科書ではなく、素朴な「凸版の絵」に豊かな空想の羽を広げていった少年の日の清張が想像されるだろう。

清張は随筆集『黒い手帖』に収録された「図上旅行」の中で、少年時代の「未知の土地」への憧れを、「自分がどこへも行けない不自由な環境からの諦めからきていたと思う」と回想している。しかし、諦めれば諦めるほど、想像力を豊かにしていったのではないか。

教科書に嵌め込まれてある各地の風景の銅版画は、こよなく私の気持を沸かせたものである。そこに書かれている山の姿、歩いている人、集まっている家並み、一本の道、それがさまざまな空想を湧かせ、どんな小説を読んでいるよりも面白かった。

（『黒い手帖』「図上旅行」）

作家になった清張は海外へも取材に赴き、「空の城」や「霧の会議」などを執筆した。しかし、旅行が不可能なときには、「図上作戦」と称し、「地図を拡げて、その上をたどりながら、自分が実際にその土地に旅行したような空想にふける」のだという。地理教科書によって育まれた空想の羽は、作家となってからも生き生きと羽ばたいていたのだろう。

しかし、地図を見るのは愉しい。地図と時刻表とを傍に置いて、小説を考えているときが、私にはいちばんたのしい時である。

（『黒い手帖』「図上旅行」）

多忙な執筆生活の中にあっても「図上旅行」を心から楽しむ清張がみえるようだ。

（学芸担当　池上　貴子）

清張原風景 点描

紺屋町（こんやまち）

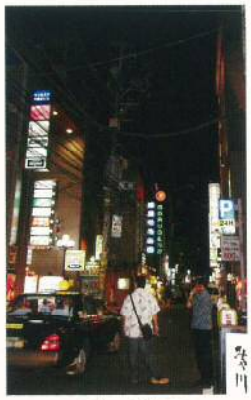
「私が高等小学校二年生のときにようやく父にも芽が吹いて、前に住んでいた亀井風呂の近くの紺屋町というところに、小さな飲食店を出すようになった。だいぶ借金をしてやったらしかった。その頃が母にとって『全盛』であった。」（「半生の記」）小倉（こくら）の台所旦過（たんが）市場の東側にある繁華街紺屋町一丁目で両親が営んだ飲食店は、一階が腰かけ、二階が座敷二間で、当初大変繁昌していた。清張はその原因を、「骨壺の風景」の中で両親が腕利きの女中を雇っていたためであったと書いている。

「幸いに両親のやっている飲食店はいくらか繁昌して、私の給料をアテにしないでもいいようになっていた。この飲食店は家が狭いせいもあって、近くの雑貨屋の二階に部屋借りをさせられた。この時は前にも書いた祖母といっしょであった。」（「半生の記」）清張が祖母カネと一緒に間借りしていたのは、川北電気小倉出張所で給仕をしていた十七歳頃である。繁昌していた時期も長くは続かず、腕利きの女中が郷里の佐世保に去ってからは客足が落ち、父峯太郎がわざわざ佐世保まで行ってその女中にまた働いてくれるよう頼んだが無駄となり、飲食店の経営悪化からふたたび場末の中島通り（紫川橋から東南の香春口（かわらぐち）へ一直線に延びた道路）に移り住んだ。

川北電気小倉出張所で
給仕をしていた頃

紺屋町の由来は、江戸期に藩御用聞の染物商（紺屋）を始め複数の紺屋が集住していたことによるという。現在は、日本銀行北九州支店、毎日新聞西部本社、多くの保険会社がオフィスを構えている一方飲食店も多く、夜ともなるとネオンが眩しい歓楽街へと姿を変える。

（碇　政幸）


現在の紺屋町

研究誌『松本清張研究』第八号発行

定価二〇〇〇円

お待たせしました、「松本清張研究」の今回の特集は「清張とメディア——時代との遭遇」です。

青年・清張がどのように一九二〇年代という時代の影響を受けたのか。作家となってから、どのように一九五〇年代という時代に受容されていったのか。これらをメディアという切り口で考えます。

思想家・鶴見俊輔さんに清張を語っていただいた巻頭を始め、内容は盛りだくさんです。

特集

清張とメディア——時代との遭遇

制約なき思考者——鶴見俊輔　清張を語る……聞き手・加藤陽子

モダニスト松本清張
——マス・メディアとの相互関連性をめぐる研究……宗像和重・十重田裕一

メディア・コミュニケーション・レトリック——松本清張『点と線』……日高昭二

松本清張のメディア戦記……土屋礼子

「採集」する身体（メディア）へ——「清張」、小倉そして民俗学……重信幸彦

座談会　**週刊誌創刊時代の松本清張**……佐野洋＋半藤一利＋郷原宏

〈資料〉昭和30年前後の週刊誌の創刊状況と、清張作品の掲載誌

"ジャーナリスト"松本清張さんの一面……岡崎満義

記念館研究ノート
松本清張の印刷所時代……柳原暁子

きよしとハルコの 探検！清張記念館

1F "推理劇場「日本の黒い霧　遙かな照射」"の巻

ハルコ　見応え充分だった～。80分も見てたなんてびっくり。あっという間ね。

きよし　真相はわからないけれど、どの事件も背後に強い権力の介在があったことは、想像できる。

ハルコ　その暗部にメスを入れたというのは、当時としては画期的だったんじゃないかな。だから「日本の黒い霧」というのは当時の流行語になったのね。

きよし　全編を通じて、清張の根底に流れるキーワードがちりばめられていたね。「清張は、疑惑の構図にタブーを持たなかった」というナレーションにしびれたよ。

ハルコ　「証言が詳しすぎる」から怪しい、というのもまさに清張節！この逆説的表現が、話が進むごとに妙に説得力ある言葉として清張の推理をきわだたせているわね。

きよし　自分の納得いく【真相】を求めて、作品を通じて世に問い続ける清張の姿が、シーンが進んでいくたび、どんどん男前に見えてくるから不思議（失礼）だ。たとえ髪がぼさぼさでも、眼鏡が脂じみていても、それがかえって頼もしい。当時の国民の、祈りにも似た期待が映像からも伝わってくるよ。

ハルコ　かっこいい男は生き方から、というところかしら。あなたも、見た目が平凡すぎるから、本当は何かすごい才能があるんじゃないかとつい思ってしまうのよねぇ。

きよし　その逆説的表現はかなりうれしくない…。

占領下の日本で起きた怪事件の数々に清張が挑む。当時の貴重な映像が時代背景をリアルに描き出します。「日本の黒い霧　遙かな照射」は、展示室1の一番奥の推理劇場で上映中です。

みんなの広場

今回は、最近お寄せいただいたアンケートの中から、記念館を訪れてみての感想を掲載しました。

・家の再現がユニーク。あまりごちゃごちゃしていない内容もいい。静かで薄暗く、故人を裏切らない落ち着いた空間がよい。
(30代・岡山・女)

・入口から圧倒されました。(本の展示の空間)とても良かった。今まで見た文学館と違った趣の場所でした。推理作家だからでしょうか。時間をかけてもう一度訪れたい場所でした。ますます清張ファンになりました。 (40代・山口・女)

・「火の路」は、卒論にも使い、思い出深い作品です。清張の歴史小説は、研究と発想が素晴らしいと思います。清張の推理小説は、その当時の時代背景もあるのでしょうが、登場人物の女性が男性から侮られる存在のように感じ、あまり好きではありません。歴史物の企画展をぜひやって欲しいです。
(20代・県内・女)

・非常に見応えのある展示でした。作家の本棚を家ごと見せてしまうという発想にはやられたと思いました。すごく興味深い展示でした。また、作家について、こういう所が知りたい・見たいと思うところが全て押えられていて非常に満足しました。また来たいです。 (20代・茨城・女)

・ぼくは初めて、松本清張さんのことを深く知りました。テレビなどでよく見ている映画やドラマも、もしかしたら清張さんの作品かもしれません。だから、見てみたいと思います。
(15歳以下・熊本・男)

・中学生の頃より読んでおり、何度読み直しても、年齢とともに感じ方が違うので、また来館したい。全作品好きです。
(50代・市内・女)

・若い頃、夢中で読んだ清張文学、私の人生の一部でした。老後は全作品読み返したいと思っています。 (50代・茨城・女)

・来たいと思っていたが、なかなか実現せず、9年越しの念願が叶った。清張の作品は、私の青春でもある。
(70歳以上・長野・男)

このコーナーでは、アンケートなどでお寄せいただいた意見をご紹介しております。
清張や作品に対する思い、エピソードなど何でも結構です。
皆さんの「声」を是非、記念館までお寄せください。
※アンケートは館内にも置いてあります。

友の会 活動報告

朗読劇「鬼火の町」(4月14日(土):参加者83名)

友の会事業の中で最も人気の劇団前進座による朗読劇も今年で4度目になりました。

今回の作品は時代劇「鬼火の町」。時代劇らしい軽快な効果音と照明、声だけで表現される様々な登場人物。役者さんの華やかな着物姿も舞台に花を添えました。

心配していた天気にも恵まれ、参加者は素敵な春の夜を楽しむ事ができた様です。

清張サロン(3月29日(木):参加者25名)

講師に梅光学院大学教授の小林慎也先生をお迎えし、この後実施する市内文学散歩の事前勉強会としてテーマを「半生の記」「骨壺の風景」にしました。

自伝的な二つの作品を様々な角度から読み比べ、討論しました。当時をよく知る地元の方の意見や、熱のこもった質問などがあり大変有意義なものになりました。

友の会会員募集!!

ただいま友の会では新規会員を募集中です。松本清張記念館友の会では清張ゆかりの地の見学や読書会・講演会等の開催、会報の発行など多彩な事業を展開しています。

会費は、8月から翌年7月までの1年間で3,000円となっております。

■友の会事業
- 講演会、シンポジウム等の開催
- 映画ビデオ等の上映会の開催
- 読書会、文芸講座等の開催
- 会報の発行
- 松本清張ゆかりの地、他都市の文学館見学事業の実施 など

■会員特典
- 常設展の招待券(年間4枚)進呈
- 企画展(年2回)のご招待
- 記念館主催事業のご案内・参加
- 記念館広報誌(館報)・企画展図録進呈
- 友の会主催事業のご案内、会報の進呈
- 友の会オリジナルグッズの進呈(加入年度のみ)
- 喫茶「石の館」(記念館内)の飲食料金1割引

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

平成19年度　中学生・高校生

読書感想文コンクール

昨年に引き続き、清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。
若年層に、より多くの作品に親しんで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神が伝えられていけば幸いです。

■応募対象　全国の中学生・高校生

■課題図書　中学生・高校生ともに下記から1作品
「時間の習俗」（新潮文庫『時間の習俗』）
「共犯者」（文春文庫『宮部みゆき責任編集　松本清張傑作短篇コレクション 中』、カッパ・ノベルス『共犯者』、新潮文庫『共犯者』）
「啾々吟」（新潮文庫『西郷札』、カッパ・ノベルス『西郷札』）

■応募方法
○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。（応募用紙はホームページからも印刷できます。）
○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし全体の字数がわかるよう応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお応募原稿はお返しいたしませんので、必要なかたはコピーをおとりください。

■応募締切　平成19年10月31日（水）　※消印有効

■応 募 先　〒803-0813　福岡県北九州市小倉北区城内2番3号
松本清張記念館　感想文コンクール係

■選　　考　松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発　　表
審査結果は、12月下旬頃、本人と学校に通知します。
最優秀賞、優秀賞の受賞者には、表彰式を行います。
なお、入選の結果や受賞作品を記念館刊行物等に掲載することがあります。
その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞　　品（受賞人数等、変更の場合もあります。）
○最優秀賞（1人）《モンブラン》万年筆「マイスターシュテュック No.149」
○優秀賞（中学の部…1人）（高校の部…1人）　文具（未定）
○佳　作（中学の部…3人）（高校の部…3人）　記念館グッズと図書券

2009年は清張生誕百年

編集・発行
松本清張記念館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093(582)2761
FAX 093(562)2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制 作　(株)エディックス

●開館時間　午前9:30～午後6:00（入館は午後5:30まで）
●休 館 日　年末（12月29日～12月31日）
●観 覧 料　一　般／500円（400円）　中・高生／300円（240円）
小学生／200円（160円）　（　）は30人以上の団体
●アクセス　JR: 小倉駅から徒歩15分　西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただくと便利です（小倉城・松本清張記念館前下車）
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館

第9回 松本清張研究奨励事業入選企画決定

第9回は、松本清張の幅広い活動に対して、現代史研究、古代史研究、文学研究など9点の応募がありました。選考委員会による厳正なる審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

企画名　「象徴の設計」と「二・二六事件」における「上官命令への絶対服従制度」に関する考察
入選者　網屋 喜行（鹿児島県立短期大学名誉教授）
奨励金　40万円

第10回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対　　象　①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体も可。

内　　容　入選者（団体）に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法　今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料（様式は自由、ただし日本語）を、平成20年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

写真募集

松本清張が上京する以前（明治42年～昭和28年）の小倉及び下関の写真を募集します。大正から昭和初期までの小倉・下関の街並みや主要な建物の写真をお持ちの方は記念館までお知らせください。

•編集後記•

今年の8月4日で開館9周年となります。いよいよ来年は節目の開館10周年。そして2009年は清張生誕100年です。皆さんと一緒に盛り上げていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。　（碇　政幸）